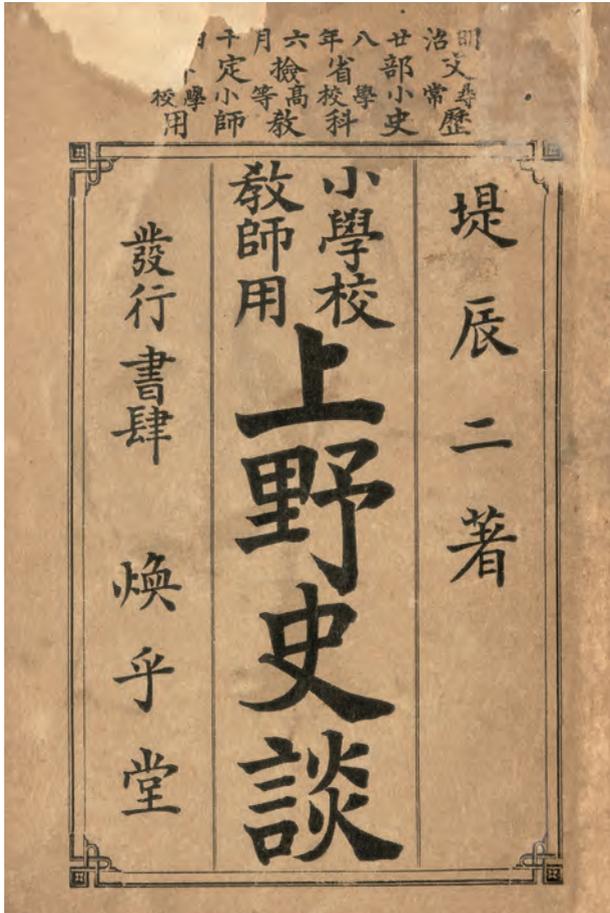


小学校教師用  
上野史談

復刊版



群馬地域文化振興会

堤辰二著

小學校  
教師用  
上野史談

發行書肆

煥乎堂



小學校  
教師用  
上野史談

例言

一斯書は。昨年來、兒童に、郷土史談を授くる爲め、編纂したるものにて、曩に、書肆煥乎堂の需に由り、本書を削減して、別に一書となし。上野史談と名けて、世に問ひしが、餘り簡略にして、事歴を盡すに足らざれば、更に原稿を訂正して、参考書とは爲したるなり。

一斯書は。上野史談の記事を、布行したるものなれば、地理の如きは、重複を恐れて、一々記載せず。

一斯書は。素前書の参考として、上梓したるものなるを以て、其題目の如きは、故らに、前書の儘を記したり。

一斯書は上野史談例言中、第四項と同じものなれば、讀者の諒せられんことを請ふ。

一著者は文詞に嫻はざれば、唯意の通するを以て満足と。別に他人の刪定を請はざりき。當に後日を待て、訂正する所あるべし。

明治廿七年九月中浣

著者識

小學校  
教師用  
上野史談

目次

第一	課	上野國上古の概説	一	頁
第二	課	碓氷峠	四	頁
第三	課	古代の土工	七	頁
第四	課	上野三碑	九	頁
第五	課	弘法大師の遺跡	十四	頁
第六	課	一ノ宮	十八	頁
第七	課	寺尾城	二十一	頁
第八	課	磯部	二十四	頁
第九	課	佐野常世の説	二十七	頁

第十課	金山城	三十一頁
第十一課	新田氏	三十四頁
其二	由良氏	四十頁
第十二課	上杉氏	四十三頁
第十三課	平井城	四十五頁
第十四課	大谷原	四十八頁
第十五課	吾妻氏	四十九頁
第十六課	和田城	五十一頁
第十七課	白井城	五十四頁
第十八課	館林尾引曲輪の説	五十七頁
其二	赤井氏	六十二頁
第十九課	高津戸の砦	六十四頁

第二十課	桐生氏	六十七頁
第二十一課	南勢多郡	六十九頁
第二十二課	武田信玄	七十三頁
第二十三課	上杉謙信	七十七頁
第二十四課	厩橋城	八十頁
第二十五課	千部の原	八十三頁
第二十六課	國峰城	八十五頁
第二十七課	松井田城附安中城	八十八頁
第二十八課	箕輪城	九十頁
第二十九課	武田勝頼	九十四頁
第三十課	沼田氏	九十七頁
第三十一課	圓珠尼	九十九頁

第三十二課	瀧川一益	百三頁
第三十三課	眞田氏	百六頁
第三十四課	知高義隆	百十頁
第三十五課	天狗岩堰	百十二頁
第三十六課	大光院	百十四頁
第三十七課	高崎城	百十七頁
第三十八課	大信寺	百十九頁
第三十九課	高山正之	百二十二頁

小學校  
教師用

# 上野史談

堤 辰 二 著

## 第一課 上野國上古の概説

**主旨** 本課は、我上野國上古の有様の、如何なりしかを述べて、其東國に於ける、要鎮たりしことを、説明するにあり。

**紀事** 人皇第十代、崇神天皇は、皇子數人、在りしが、特に豊城入彦命（いづめ）、活目入彦尊（いづめ）を、鍾愛し給へり。然れども、未だ孰を嗣とも定められず。一日、二皇子に命じ、各其夢むる事を、獻せしめ給ひしに、二皇子齋戒して臥し、明日豊城命、奏し給はく、御諸山に登て、東に向ひ、槍を弄し、刀を撃つこと、各八たびなるを夢むと。活目尊は、同じ山の巔に登り、四方に繩を纏り、粟を啄む雀を、逐ひしを夢むと奏し

給へり。時に、天皇、兄は唯東にのみ向へば、宜く東國を治むべし。弟は四方に臨みたれば、宜く朕の位を嗣くべしと、宣り給ひて、活目尊を皇太子と爲し、豊城命に、東國を治めしめ給へり。時に、紀元六百十一年なりき。豊城命、東國鎮撫の命を奉して、毛野國に下向せられ、遂に上毛野君、下毛野君の始祖と爲り給ひぬ。後百七十餘年を経て、景行天皇、亦、豊城命の孫、彦狹島王命の王子を、上野八綱田と云ふ。御子、即、彦狹島王なり。を山道十五國の都督と爲し給ひしが、王、下向の中途、不幸にして、薨し給へり。東國の百姓、王の祖命おやみこと以來の徳を慕ひ、一日も早く、王の下向せられんことを願ひしに、王の薨せられしを聞き、悲みて已まず。責めては、王、屍をば、東國に葬り奉らんと圖り、夜に乗じ、竊かに、王、屍を盗み、來て之を毛野國に葬り奉れり。翌年、天皇、更に王、子御諸みもろ別王わかひに詔し、東國を鎮撫して、父王の業を、嗣かしめ給へり。御

諸別王東下し、毛野國に治し給ひ、按撫の善政を布き給ふ、時に、適蝦夷擾亂の企あり、王乃ち兵を發し、討ち給ひしに、酋長、足振邊、大羽振邊、闇男邊等、陣門に至り、叩頭して、罪を受け、盡く其地を獻りしかば、是より東國、暫く無事に歸して、王の子孫、永く東國に遺存したり、後二百餘年を経て、仁徳天皇の朝に、始て毛野國を分て、上毛野、下毛野の二國と爲し給ひ、其後三百餘年、元明天皇の朝に、國名郡郷名は、好字を用ゆることに、定められし時、毛字を省き、上野、下野の二字とし、其訓にのみ、毛の音を存せられしならんと云ふ、

**雜說** 高崎の人、富岡正忠の説に、毛の字は、ミケと訓み、三毛、御毛など、同義にて、御食の義なるべし、御食野を、毛野の國と云ふは、思ふに、此國地形廣平にして、田畑開け、嘉穀豐饒にして、御食物多き、野邊なる故なるへしと云へり、又、毛は、穀物の總名にして、野は、毛

物の生ゆる地なりと云ふ説もあり。

西群馬郡、京ヶ島村、大字、元島名村に古塚あり、形狀、山陵の如し、土俗、稱して將軍塚と呼ぶ、塚北に池あり、將軍淵と云ふ、此地は、上古、彦狹島王を葬りし處なりと云ひ傳へたり。

## 第二課 碓氷峠

**主旨** 本課は、道路交通の沿革を述べて、日本武尊の當國に於ける、事蹟を説明す。

**沿革** 往時、東海道の箱根峠、中山道の碓氷峠の兩所は、關東第一の要害なればとて、何れも關所を設けて、嚴く出入の人を檢視せり。當時は、通路の險惡なるを、宜しとせたる時代なれば、行旅の迷惑せしこと、一方ならざりき。今は之に反し、交通の便利を主とす